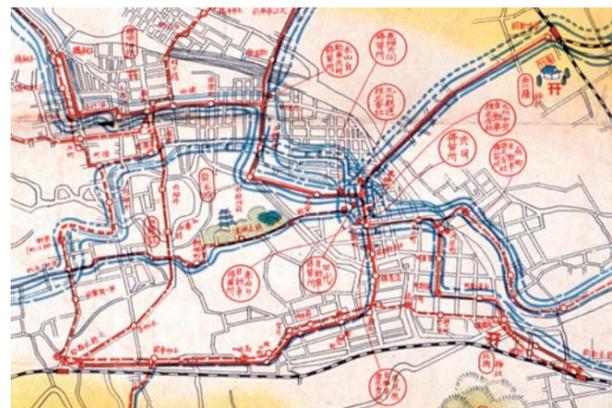


表紙地図紹介 『熊本地図（裏面）』1931年（昭和6）

第4号では、1931年（昭和6）に発行され、熊本県内の名所や熊本市内における官公庁の所在と、最寄り停留所の案内が書かれた「熊本地図」のうち、裏面記載の熊本県内公共交通一覧を使いながら、熊本県内のバス交通について紹介します。

日本最初の路線バスは、1903年（明治36）京都において運行が開始され、全国に広まっていきました。熊本においては、1912年（大正元）10月、熊本中央郵便局前の洗馬橋から山鹿温泉間を1日2往復したことが、最初の運行とされています。今回の地図が発行された1931年（昭和6）時点では、河内・玉名・山鹿・菊池・阿蘇・馬見原・矢部・城南・松橋・三角の各方面に路線バスが整備されており、熊本県全体で路線バス網が拡大していることがわかります。

当時の地域状況を反映し、現在は路線バス運行がない植木～菊池間のルートがあったり、城南方面においては、現在幹線となっている南熊本・田迎地域を経由するバス路線は存在せず、川尻から富合



表紙の地図の中心市街地部分を拡大

を経由して城南に至るルートのみが運行しています。

次に、熊本市域内の交通に目を向けると、熊本市営バスが1927年（昭和2）に運行を開始しています。路線バスは、1924年（大正13）に運行を開始していた路面電車を補完するという目的がありました。

2014年現在では、路面電車の電停35のうち34がバス停留所のすぐ近くに存在し、同じ方面にも運行しており、乗換えを前提としない状況となっていますが、1931年（昭和6）時点では、路面電車の電停34のうち、市営バスの停留所近くにあるのが21（全体の60%）、行き先も路線ごと異なっていました。路面電車とバスを乗換えしながら市域内を移動できる、効率的な公共交通ネットワークがあったことが読み取れます。（注：今回の地図では路面電車の電停が一部省略となっています）。

また路線バスの発着地点は、現在の熊本交通センターのようなバスセンターはなく、数ヶ所に分散していました。当時の繁華街であった花畑地区が一番多く7ヶ所ありますが、熊本軌道川尻電車の始発駅があった河原町や水道町交差点にも存在しています。

さらに路線バスのルートに注目してみると、現在の下通・上通のアーケード内がルートとなっていたり、京町・池田方面では、市役所からKKRホテル熊本前を通る現在のルートではなく、市民会館前から行幸橋を渡り、熊本城本丸と二の丸の間から加藤神社前を通るルートになっていたりと、現在とは違うルートを運行していました。

【参考文献】

佐々木 烈「日本自動車史 都道府県別 乗合自動車の誕生 写真・史料集」2013年

『九州新聞』「自動車経営案」昭和2年7月24日 2頁

（研究員 堀 満）

第8回講演会のお知らせ

WHO（世界保健機関）は、「アクティブ・エイジング」という政策枠組みを世界各国に呼び掛け、それに取り組む都市を「高齢者にやさしい都市（エイジ・フレンドリー・シティ）」として世界的ネットワークを組んでいます。世界の高齢課題先進国日本では、同じように高齢社会対策基本法にもとづいて、生涯現役社会づくりに取り組んでいます。小川氏は、高齢化先進県の山口県における地域政策として、生涯現役社会づくりを掲げて取り組んでこられました。こうした経験から熊本の高齢地域政策について提言していただきます。

日時：平成26年5月22日（木）午後3時～（2時間程度）

場所：熊本市国際交流会館7階ホール

演題：「生涯現役社会づくり」

講師：小川 全夫さん（NPO法人アジア・エイジング・ビジネスセンター理事長）

定員：200名（先着順、参加費無料）

※申込みはひごまるコールまで（096-334-1500 / higomaru-call.jp）



熊本市都市政策研究所ニューズレター 第4号 2014年（平成26年）4月

【編集・発行】熊本市都市政策研究所

〒860-8601 熊本市中央区手取本町1-1 熊本市役所本庁舎13階 ☎096-328-2784

宝くじの収益金は公共事業等を通じて社会に貢献しています。

E-mail: toshiseisakukenyusho@city.kumamoto.lg.jp ホームページはこちら

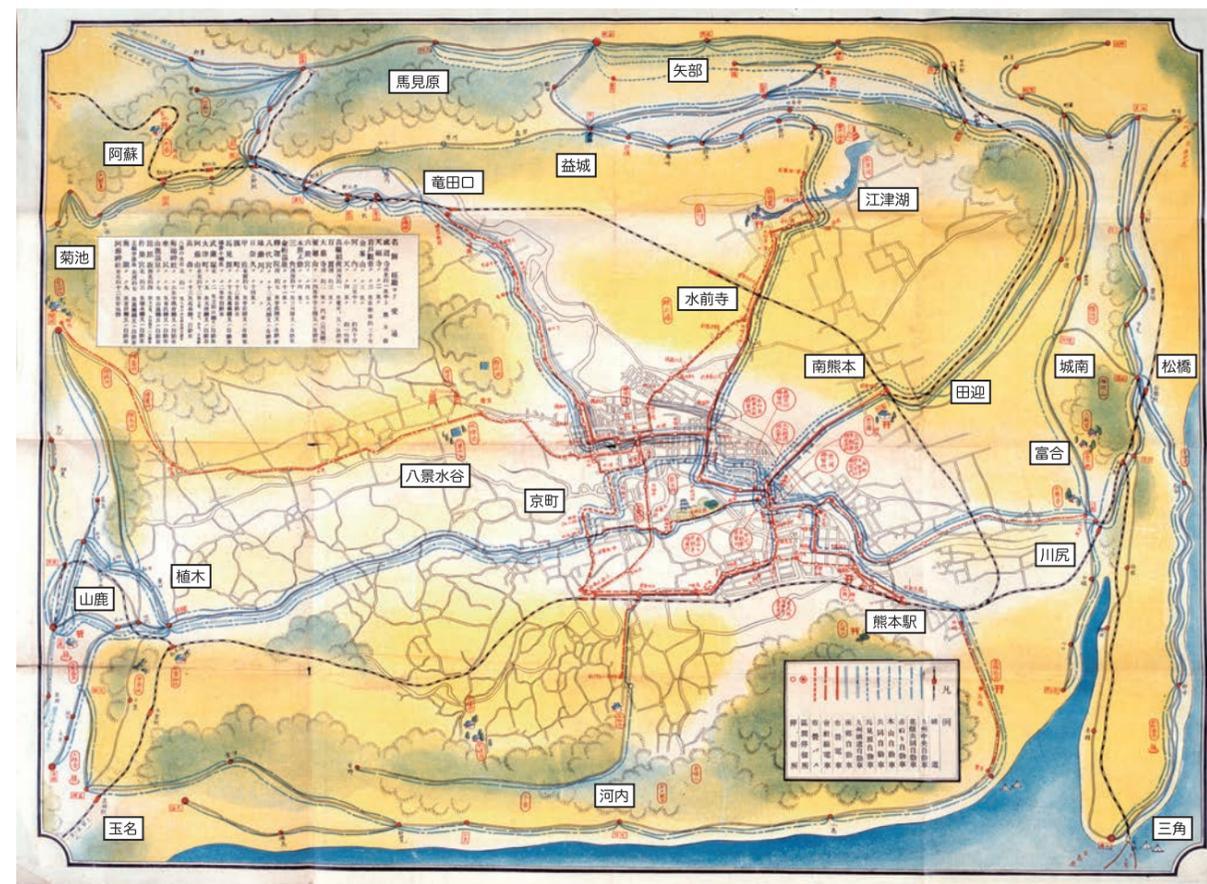
熊本市都市政策研究所

検索

IPRK

Institute of Policy Research, Kumamoto city

熊本市都市政策研究所ニューズレター 第4号 2014年（平成26年）



昭和6年『熊本地図（裏面）』（熊本県立図書館所蔵）〔熊本市歴史文書資料室提供〕 ※四角囲みで記載した地名は、原本の地図に加筆しております

〈講演会報告〉

第7回講演会 「元気で楽しい都市に観光客はやってくる」
公益財団法人日本交通公社シニア・フェロー 小林 英俊氏

〈研究コラム〉

「人口データに見る年齢別の人の動き」
～熊本市と福岡市の魅力の違いとは～

活動報告

学会参加報告

表紙地図紹介

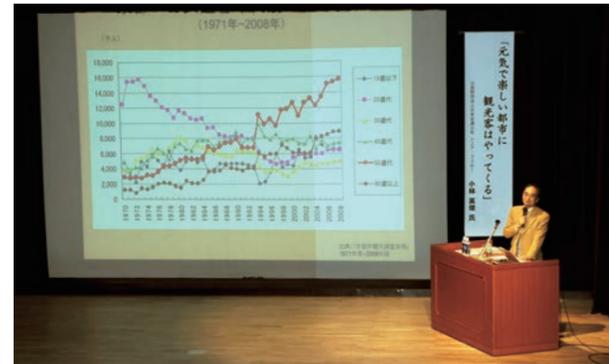
第8回講演会のお知らせ

平成25年度第7回講演会報告（要旨）

第7回講演会

期日 平成26年2月7日
場所 熊本市国際交流会館7階ホール

「元気で楽しい都市に観光客はやってくる」
講師：小林 英俊氏
(公益財団法人日本交通公社シニア・フェロー)



近年、観光市場が成熟化しているといわれる。経験の内容も回数も豊富で、自分の趣味、嗜好がはっきりした旅行者が増えてきている。このような潮流の中、もはや有名観光資源だけでは人を呼ばなくなった。

これからは、観光の意味をより広く捉え、旅行事業者主導の従来型観光から、市民を中心にしたあり

方を考えていかねばならない。2000年以降観光客を1000万人も増やした京都市、地方博後観光客をV字回復した長崎市、住民と行政が一緒になったまちづくりを観光にしている香取市、住民のやる気や意欲を積極的に活用した新潟市の事例からいえるのは、観光は市民の心を豊かにし、地域を元気にする手段であり、元気で楽しいまちに人は集まるといことである。

名所・名物という「商品」としてとらえられてきた観光資源の多くは、本来、住民の誇りであるべき地域の財産である。観光客をただ案内するだけでなく、住民自身がその資源の楽しみ方を考え、話し合い、情報発信することが重要である。

また現代の成熟した観光客は、名所旧跡よりもむしろ、その地域ならではの良さを味わい、体験することに興味を持っている。今後の観光は、現地の生活空間とそこでの住民の暮らしぶりを示していくことが有益である。

地域に活気を与えようとする市民の動きに対して、行政の側は指導的立場をとるのではなく、市民の自主性を導き出す形で支援していく必要がある。

地域資源の積極的な情報発信、住民の活気とより楽しいまちにしたいという思い、そして行政のバランスの取れたサポートがうまく組み合わせられれば、より多くの人々が訪れるまちが作り出せるだろう。

※講演会要旨の文責は、ニューズレター事務局です。内容の詳細は、都市政策研究所ホームページに掲載しています。

都市政策研究所活動報告 - 観光に関する事前研修会を開催 -

都市政策研究所では第7回講演会に向けて、平成26年1月24日に、東海大学観光ビジネス学科小林寛子教授を講師に、観光に関する庁内事前研修会を開催しました。

研修会のテーマは、現在、観光の分野でキーワードのひとつとなっている“着地型観光”でした。これは、地域が主役になる、新しい観光のあり方で、旅行会社が作った団体旅行のような従来の発地型観光ではなく、地域の人々が主体になって地域の魅力を発信し、販売し、運営するものです。このことを講師の体験を交え、地域の魅力を高める方法など、着地型観光のあり方を行政の役割、地域の役割を例に挙げながら実践的にお話ししていただきました。

地域の魅力は地域の人でなくてはわからない部分と、地域の人には当たり前で気づかない部分とが共存します。この地域の魅力(宝)を掘り出す作業は、まさに地域を見直す作業でもあり、お金を払って来てもらうためには、その宝を磨き、加工する作業も必要です。これは、「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりにとって重要な視点です。

熊本城をはじめ、多くの熊本の魅力をどうやって発信していくのか?この問いかけは、住んでいる人が誇りを持てるまちづくりにもつながります。参加者からは、熊本の魅力を新たな視点で探してみたい、新たな街づくりの切り口が見出された等の感想があり、観光とまちづくりを一体化して考えることの重要性を学ぶ研修会となりました。



研究コラム 人口データに見る年齢別の人の動き

～熊本市と福岡市の魅力の違いとは～

熊本市の平成26年1月1日現在の人口は73万9628人、前年度比較で947人増加し、人口増加が続いています。これは九州新幹線鹿児島ルート全線開業や政令指定都市への移行による効果から、本市への転入者が増加したことが理由と考えられます。

九州には本市を含め3つの政令指定都市がありますが、その一つである福岡市は九州の拠点都市として発展し、人口は熊本市の約2倍にあたる150万9893人(平成26年1月1日現在)、現在も人口増加を続けています。そこで人口規模は違いますが、人口増加という点で共通点のある福岡市と熊本市を比較して、年齢別の人の動きにどんな違いが見られるのか男女別に調べてみました。

●若者層の動き

下のグラフは、熊本市と福岡市の5歳階級別に男女の転入超過数の割合を比較したものです。まず目に付くのは15歳から29歳の若者層の動きです。福岡市は男女ともこの年齢層で大きく転入超過となっています。

それに比べ熊本市では、男性は15歳から19歳の年齢層が最も転入超過となっており、この転入超過の傾向は24歳まで続きます。女性は20歳から24歳をピークに転入超過となっており、男性とは反対の動きをしています。このことから熊本市の若者男性は、大学や専門学校などへの進学や就職のために県外へ転出していると考えられます。また女性の場合には、他のデータによると県内から本市への転入超過数は男性の2倍近くに上っていること

から、この女性年齢層の転入超過は県内からのものでないかと考えられます。

これらのことから、福岡市は進学や就職などによって多くの若者を集めていることがわかり、また熊本市の場合は、県内の女性には身近な魅力的な都市となっていますが、男性から見ると教育や雇用面などでは十分ではないようです。

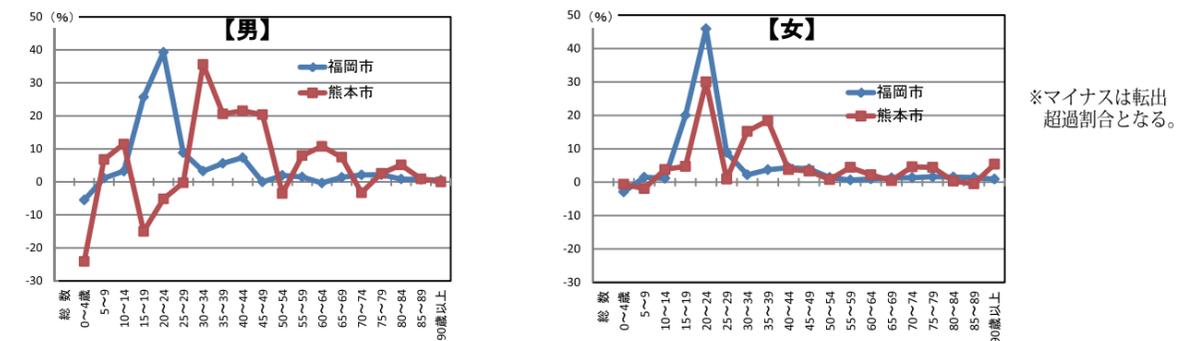
●中高年齢層の動き

さらにグラフを見ていきますと30歳から49歳、55歳から64歳の年齢層で転入超過の割合が熊本市が多くなっています。これは男女とも同じ傾向を示しています。特に男性の30歳から34歳の年齢層が一番転入超過割合が多くなっており、この年齢層は、就職や結婚のため、熊本市へ定住してきているのではないかと考えられます。さらに興味深いのは、熊本市の場合55歳から64歳の年齢層で転入超過の割合が福岡市よりも多いことです。特に男性に顕著に現れており、この年代は退職をむかえた人達の多い年代です。

以上のことから熊本市は福岡市と比べ、若者男性にとっては魅力が不足しているようですが、中高年世代からは男女ともに人気のある都市となっています。これは熊本市の恵まれた自然環境、地下水の豊かさ、医療などの都市機能などが住みやすさにつながっているのではないのでしょうか。このあたりに、熊本市の魅力や特色を生かしたまちづくりのヒントがありそうです。

(副所長 植木 英貴)

熊本市と福岡市の5歳階級別転入超過割合(平成24年)



出典 総務省「住民基本台帳人口移動報告」(2012年)より作成

※マイナスは転出超過割合となる。

国際日本学会 (IAJS) 第9回研究発表会 参加報告

平成25年12月7日に早稲田大学で国際日本学会(IAJS)が開催されました。国際日本学会は、日本に関する人文・社会科学分野の研究成果を英語で発表、発信していくことを目指す学会です。日本ばかりではなく様々な国から研究者が参加していることもあり、さながら国際学会のような雰囲気でした。今回は、教育分野のセッションで明治期の熊本師範学校の修学旅行を通じた地域交流について発表を行いました。修学旅行は日本の学校制度の中で特徴的なものであるため、多くの方に興味を持っていただきました。また当時、学生を通しての二地域の交流は全国的にもめずらしかつたため、明治期の熊本と沖縄という二地域の交流に着目した点にも関心が集まりました。学会では教育だけではなく、その他にも様々なセッションがあり、研究分野を越え、また国を越えた交流ができ、非常に有意義な学会参加となりました。

(研究員 松永 歩)